

第6部会

の影響が看取される。家康曾孫の敬台院を養母にもつ日精上人は義姉芳春院の葬送を寛永九年に神田法詔寺で行い、同年の大石寺晋山に際して法詔寺本堂を遷し大石寺御影堂を再建した。

法詔寺は寛永十一年に浅草鳥越へ引寺され、正保二年の滅却まで常泉寺五代日優師が回向を勤めた。更に日精上人は京都本圀寺と越後本成寺の本末諍論の仲裁を勤め、保田妙本寺の宗祖真筆曼荼羅流出を「興門の瑕瑾」と叱責し本所妙縁寺を大石寺末に加えるなど勝劣派全体を教導する立場にあり、天英院を教化したことは想像に難くない。

四、天英院有縁の諸精霊と近習の大石寺信仰 最後に天英院が大石寺信仰に至った人脈と背景をめぐって下関前から近衛家に奉公した近習の大石寺信仰との因縁に再検討を試みた。常泉寺に埋改葬された天英院有縁の諸精霊、近習の幕臣、大奥女中の出自を諸史料と照合した結果、例えば加賀藩主の前田綱紀に仕えた後に近衛家に奉公し下関に従った堀山城守正勝の家系や側用人・本間季孝と姻戚関係の榊原家及び井上家出身の幕臣や奥女中が天英院に伴っていた。更に乳母から天英院付局として大奥へ奉公した下村頼母介某女は芝上行寺の日衆師と天英院付執事・石川摂津守盛行の実母であった。家宣側室や天英院付女房(兒玉家)のほか、近習の多くが向島常泉寺を菩提寺として大石寺門流に帰依していた。

「法華翻經後記」をめぐる諸問題

金 炳 坤

僧肇記「法華翻經後記」(以下「翻經記」)は、僧祥撰集『法華伝記』巻第二の「諸師序集」のなかに収録され、『妙法蓮華経』の訳経場の様子と訳出後の状況とが克明に記されている極めて貴重な資料である。

曾て日蓮は、この「翻經記」を日本国における『法華経』の縁深き所以を闡明する未来記の大典拠として用いた。また、近代では、婆藪槃豆と鳩摩羅什との接点が窺われる唯一の漢文資料として「世親年代論」の題材(Anacker, 1984)に用いられた。

このように肯定的に用いられる例もあるが、実際は、「翻經記」を引用する最初の文献にして偽撰説の原点とも言える証真の『法華疏私記』のように、否定的に用いられる例のほうが多い。

「翻經記」偽撰説については、大野法道『佛書研究』五十六号、一九一四年)、松本文三郎『佛典批評論』一九二七年)、道端良秀『佛書解説大辭典』十卷、一九三五年)、塚本善隆『肇論研究』一九五五年)、牧田諦亮(同上)氏らによる注意すべき指摘があるが、その研究年代の古さ故にあまり知られておらず、いずれも「翻經記」が主題でないために、問題に対する充分な論究、かつ明確な論拠が示されていない。したがって、あえてここに小考を草し、これが偽撰であることを改めて

報告する次第である。

すなわち、「翻経記」を偽撰とする論拠を示せば、以下の三点に集約される。

(1)品数の問題。訳出当初の『妙法蓮華経』は提婆達多品を欠く二十七品なるものであるが、「翻経記」では、訳出当初の『妙法蓮華経』を二十八品と記している。(2)普門品の偈の問題。普門品の偈は、先行する二本の漢訳、すなわち『正法華経』と『妙法蓮華経』とは訳出されておらず、『添品妙法蓮華経』以降にはじめて追加されるものであるが、「翻経記」では、『正法華経』に普門品の偈が存すると記している。(3)所依梵本の問題。「翻経記」では、鳩摩羅什の『妙法蓮華経』と婆藪槃豆の『妙法蓮華経優婆提舍』（敦煌出土写本の題記に大魏永安元年「五二八年」とあることから、漢訳の年代が推定される）との所依梵本が同じであると記しているが、『妙法蓮華経優婆提舍』に引用されている経文を抽出し『妙法蓮華経』と対比することによって、両者の所依梵本が異なることが確認できる。ゆえに、既成の歴史事実に相反する以上の三点に基づいて「翻経記」の偽撰説は証明できるものと考ええる。

さて、「翻経記」の作者については僧祥の創作か或いは別人の述作か不明であり、また、述作の経緯や目的に関しても明らかではないが、記事の内容からして、「翻経記」述作当時の『妙法蓮華経』の正当性を主張し、それを意図してのことであると考えられる。とくに、訳出当初の『妙法蓮華経』を二十八品とすることから、「宝唱録」に典拠をおいたことが指摘できる。さらに、撰述年代については、出典と目される文献のなか

で、栖霞の『法華経玄賛要集』（唐乾符年間）が最も新しく、日本に現存する『法華伝記』の最古の伝本が大治五年（一一三〇年）に書写されていることから、九世紀の後半から十二世紀の前半の間と推定することができる。

これらの諸問題に関して、詳しくは、拙稿「僧肇記「法華翻経後記」偽撰説の全貌と解明」（『仏教学論集』二七号、二〇〇九年）を参照されたい。

『法華験記』にみる

いわゆる「妙法経力」の諸相

間 宮 啓 壬

平安中期の天台僧・鎮源の編纂になる『法華験記』がいわゆる「持経者」研究の格好の素材となってきたことは、周知の通りであるが、今回の発表の場合、関心の対象は、「持経者」ではなく、その「持経者」らが担うもの、つまり『法華経』の側にある。すなわち、『法華経』を信じ担う者にとって、『法華経』という経典はいかなるものとして意味づけられたのか、という問題関心である。こうした関心のもと、『法華験記』を素材として取り扱った先行研究は、意外なことに殆ど見当たらないが、そんな中で、宗教学者の華園聰磨氏による見解は注目に値する。氏によれば、『法華験記』に描かれる『法華経』はまさに「力あるもの」であり、その『法華経』の力こそ、登場人